

なぜ『焰の舞』に、大沼は出てこないのか

—— 考察ノート（2026年7月27日・拓也）

検証済みの事実（ここから考える）

- ・全文検索で「大沼」＝0件。「築港」73件／「野蒜」19件／「仙臺」5件／「呉服」0件
- ・第1～6章を精読した限り、主要人物に大沼系の人物はいない。主人公＝子爵成瀬淳作（旧領主）、遠山家（勝衛・袈裟次・富乃・淀爺）、清原家（誠也とその亡父）、鳴神、東京側（板木屋・上總屋・小僧・周子）
- ・遠山家は「野蒜村草創の旧家」で「維新前までは旧仙台藩からお船番所の支配を預かっていた」＝地元の家。仙台の商人ではない
- ・築港主唱者は三人と明示され、その内訳は勝衛（蟄居）／鳴神（発狂）／清原の父（割腹）ですべて埋まっている
- ・家伝の十右衛門は「晩年、野蒜築港・運河造成に尽力」（2003年書簡）。仙台・芭蕉の辻の呉服商で市会議員
- ・青果は野蒜の廃墟を歩いた（明治33～36年頃）。築港が壊滅した明治17年から15年以上あと。当事者への取材の記録は、レファレンス資料には出てこない
- ・青果は上京後、二度と野蒜を訪れていない

五つの仮説の検討

1 登場させない必要があった —— 可能性は低い

理由：

・ 青果はこの作品で、実在の県令・工部省のお雇い外国人・鳴瀬川・宮戸島・塩釜・石巻・女川・釜石・牡鹿桃生・松尾神社まで実名同然に書いている。土地と事業は隠していない

・ 隠しているのは人名だけで、しかもその配慮は主人公側にこそ働いている（子爵家は「M——河」「爵位を記していない名刺」のように伏せ、遠山・清原・鳴神は架空の姓）

・ つまり**全員が仮名**なのだから、「大沼だけを外した」という構図にならない

・ 十右衛門は明治後半まで仙台で市会議員を務めた人。**遠慮すべき相手なら、むしろ好意的に登場させるのが自然**（当時の新聞小説の作法として、地元の名士は美化して出ることが多い）

→ 「差し障りがあって消した」と考える必要はない。この線は薄い。

2 そもそも事業に関わっていなかった —— 要検証。だが「関わっていなかった」とは言えない

ここが最も慎重に扱うべき点である。

・家伝の根拠は2003年の書簡（坂本勝が整理した記録を優氏が編集したもの）であり、一次資料ではない。「聞くところによると」の伝聞である

・一方、否定材料もない。野蒜の新市街には「銀行・米商会所」が建ち、「仙台・石巻はもとより東京方面からの進出者もあって、早くも2百戸を超える新興都市となった」（レファレンス資料E節）。仙台的商人が進出した層は実在した

・十右衛門の関与は主唱者三人ではなく、出資者・資材の商い・地元有力者としての周旋のいずれかだった可能性が高い。小説が描いたのは「主唱した三人とその家族」であり、出資者や商人は端役にも出てこない

→「小説に出ないこと」は「関わっていないこと」の証明にならない。この小説は野蒜築港の通史ではなく、主唱者三人の家の悲劇を描いた作品である。

3 真山が調査をしていなかった —— 部分的に当たっている。

ただし「していない」より「する必要がなかった」

・青果が野蒜を見たのは廃墟になって15年以上あと。彼が受け取ったのは空しく建つ紀功碑と、火の消えた新市街という光景である

・レファレンス資料は「もしこの体験がなかったら、後年この生々しい描写を遂げた作品は生まれなかったであろう」と述べる。つまり創作の起点は取材ではなく、廃墟の印象だった

・ 実際、作中の築港の記述は**新聞記事や県史で読める水準の事実**（大久保利通の構想／お雇い外国人の実測／県令を動かす／地方債／防波堤の流失／二十何万円）で構成されており、関係者からの聞き取りでなければ出てこないような細部は見当たらない

・ ただし「主唱者三人のうち一人が発狂し一人が割腹した」という骨格は、**現地の口碑としてよく知られていた話**である可能性が高い（＝取材せずとも聞こえてくる範囲）

→ **青果は関係者名簿を持って書いたのではない**。だから大沼が出ないのは当然、という説明になる。この線は有力。

4 全くのフィクションである —— 「全く」は言い過ぎ。事実の骨格+架空の人物

・ **事実**：野蒜築港とその壊滅、時代背景、地理、地名、主唱者が複数いて破壊したという構図

・ **創作**：登場人物のほぼ全員。とくに双生児の姉妹、片方だけが実子でないという秘密、旧領主の子爵との出会い、子爵の恋人が同じ宿にいるという偶然——これらは明らかに小説的な仕掛けである

・ つまり本作は「**実在の事件を背景にした、架空の人間ドラマ**」。日露戦後の新聞小説の典型的な作り方である

→ 「**事件は実話、人物は創作**」と考えるのが最も自然。この線が本命。

5 その他——私が最も有力と考える読み

上の③④を統合すると、こうなる。

青果は「野蒜築港」を、人物の物語ではなく「土地の悲劇」として書いた。

>

彼が書きたかったのは、中央の国策に踊らされ、田畑を売り、そして一夜で全部を失った村そのものである。だから登場人物は類型に絞られている——狂った者、腹を切った者、閉じ籠もった者、そして「それでも港を作る」と言い続ける次の世代の娘。これは実在の誰かの伝記ではなく、あの事件が生んだ人間の型の見本帳である。

>

そして青果自身が「落魄の極、郷里にも身の置きどころなく」という時期に、その廃墟を歩いた人だった。彼は野蒜に自分を見たのだと思う。だから彼は、事業に出資した仙台の商人ではなく、土地に取り残された者たちの側から書いた。大沼十右衛門は、彼が書こうとした側にいなかった。

もう一つ、現実的な要因も挙げておきたい。

十右衛門の関与は、小説にするには「地味すぎた」。

出資や周旋は、発狂や割腹に較べて物語にならない。青果は新聞連載を書く職業作家である。主唱者三人に絞ったのは、構成上の当然の選択だった。

結論

「大沼が出てこない」ことは、家伝を否定しない。

順位をつけるなら――

- ・ 1 ⑤その他（土地の悲劇として書いた／主唱者三人に絞る構成上の選択）

最有力

- ・ 2 ④事実の骨格＋架空の人物 有力（⑤と両立する）

- ・ 3 ③取材していない（する必要がなかった） ○有力

- ・ 4 ②関わっていなかった △否定材料もない＝未決。テーマ8の宿題として

残す

- ・ 5 ①登場させない必要があった ×薄い

それでも確かめるべきこと（テーマ8の残り）

- ・ 西脇千瀬『幻の野蒜築港』で、築港の出資者・関係者名簿に「大沼」がある

か ←②を決める唯一の手

- ・ 東松島市（野蒜）の郷土資料・築港関係文書の名簿類

- ・ 『仙台市史』で十右衛門の市会議員在任と「野蒜築港に尽力」の実態

- ・ 第7章以降の翻刻を続け、脇役到大沼系の人物が出ないかを最後まで確認す

る（現時点では第6章まで）

- ・家伝の出どころ＝2003 年書簡の該当箇所を再読し、「野蒜築港に尽力」がどの程度の強さで書かれているかを確認する

物語としてどう書くか（本編・冊子への提案）

- ・☒書かない＝「十右衛門は『焰の舞』のモデルである」
- ・☒書ける＝「この小説の舞台は、十右衛門が晩年に力を注いだと伝わるその事業だった」——事実として、時代も土地も重なる
- ・☒書ける＝「父が長年探していた幻の小説は、いま誰でも読める。そして読んでみたら、うちの名前は出てこなかった」——これは調べた者の正直な報告として、そのまま一節になる
- ・☒そして青果自身が落魄の時期に野蒜の廃墟を歩き、二度と戻らなかったという事実は、記録を焼き、土地を離れた成沢家・大沼家の物語（ルーツ調査_成沢家父方_落城と庄内定着_調査要領_20260726）と、静かに響き合う。ここは演出として使える